大人 が出会った微生物検査症例—1

尿から Bacteroides fragilis を検出し,

S状結腸癌の膀胱浸潤が判明した症例

名城病院 細菌検査室 清水 聖一/池崎 幸司/西山 泰暢

I. 症例

患 者:54歳,女性

主 訴:血尿・混濁尿・尿の勢いが悪い

排尿痛・腹痛・背部痛・腰痛

既往歴:なし

以上のような症状のため、2002 年 4 月 15 日当院、 泌尿器科を受診。初診時の尿一般検査の結果は、**表** 1 に示すように、蛋白(2+)、潜血(2+)、沈渣に て、WBC 100 以上/1 視野、細菌(1+)という結 果であった。この結果より、細菌検査が依頼され た。そして、急性膀胱炎と診断され、レボフロキサ シン(クラビット錠)100mg×3 回/7 日を処方され、帰宅した。

表 1 尿一般検査

科別・主治医 氏 名 患者 I D 検査年月日			02 04 15 - 06115				
					7	メント①	
					7	メント②	
				1		混濁	(2+)
2		色調	オウカッショク				
3		比重	1.023				
4		PH	6.5				
5		蛋白	(2+)				
6		糖	(-)				
7		ケトン体	(+)				
8		潜血	(2+)				
9		ウロビリノーゲン	(+)				
10		ビリルビン	(-)				
11		アスコルビン酸					
12	沈	赤血球	<1/HF				
13		白血球	>=100/HF				
14		扁平上皮細胞	5-9/HF				
15		移行上皮細胞	<1/HF				
16	渣	硝子円柱	0				
17		細菌	(1+)				
18		真菌·酵母	(-)				
19		変形赤血球	(-)				
20			藤康Ca (1+)				

尿から Bacteroides fragilis を検出し、S状結腸癌の膀胱浸潤が判明した症例

Ⅱ. 細菌検査

1) 塗抹検査

図1に示すように、中間尿のグラム染色では、白血球が、1視野に6~8個と炎症像が見られ、グラム陽性レンサ球菌3+、グラム陰性桿菌2+が認められた。グラム陰性桿菌は、形態が小さく、腸内細菌以外の菌種と思われた。

2) 培養検査

通常の中間尿検査で実施している好気培養では、 図2に示すように、グラム陰性桿菌は、全く発育しておらず、グラム陽性球菌が少量のみ認められた。 培養1日後、グラム染色を再検したが、前回と同様の結果であったため、直ちに、嫌気培養を実施した。

嫌気培養では、図3に示すように、多量の細菌が 発育した。BBE 寒天培地上のエスクリン分解陽性 の Bacteroides fragilis 3+, ブルセラ HK 寒天培地には、嫌気性グラム陽性球菌 3+, 黒色コロニーの Prevotella sp.1+も認められた。

3) 結果報告

細菌検査の結果報告書を**表2**に示した。1日培養後、中間報告書Aのコメント欄に、「グラム染色では菌が多量見られるが、好気培養では、ほとんど発育せず。嫌気性菌が関与しているか、あるいは抗生剤使用中では」、と記載し、直接、主治医に報告した。他の病院にも受診しておらず、最初の検査依頼伝票の情報どおり、抗生剤は未使用であった。

2日後、報告書Bのコメント欄に、「嫌気性菌が 検出されました。検体採取時に便が混入したのか、 または、腸管との癒着などがあるのでは」、と記載 し、再度、主治医に会い、説明した。その結果、主 治医は患者に連絡を取り、患者は入院して、精密検 査を受けることになった。

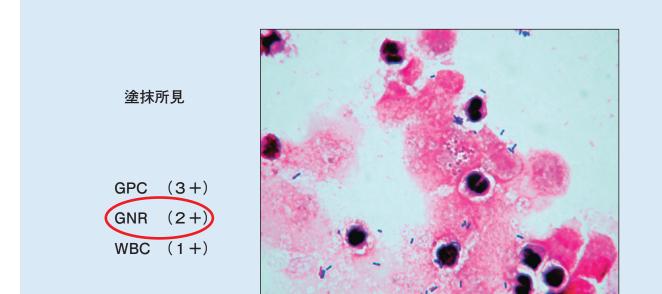


図1 グラム染色結果

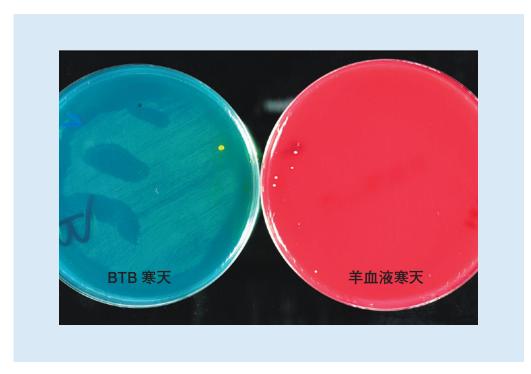


図2 培養結果 (好気培養 48 時間)



BBE 寒天

図3 培養結果(嫌気培養48時間)

Ⅲ. 経過

病理組織検査、細胞診検査、腹部エコー、CT検査、MRI検査、膀胱鏡検査を行い、S状結腸癌が認められ、その膀胱浸潤と診断された。その後、S状結腸を切除したが、膀胱、子宮にも癌が転移し、膀胱全摘、子宮全摘、両側附属器切除という残念な結果となった。

Ⅳ. 結果・考察

今回は、検査材料のグラム染色と培養結果の不一致に気づき、臨床の予期せぬ展開となり、S状結腸癌の早期発見に役立つことができた。保険点数の改正等により、軽視されがちなグラム染色であるが、細菌検査においては、重要な検査であることが再認識された。

"おかしい"と思ったときには、報告書にコメントを付けて結果を送るだけでなく、直接、主治医に会い、話し合うことが大切である。また、迅速に行動することで、臨床に貢献できるかどうかは左右されると考えられる。

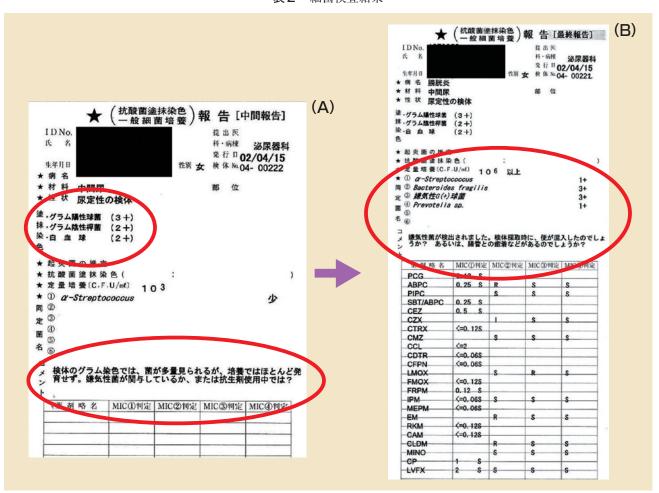


表2 細菌検査結果